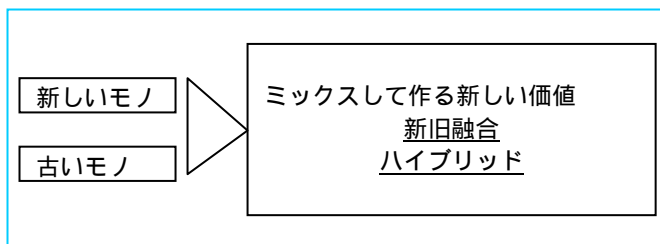


5月の季語 古茶(こちゃ)

新茶に対して、前年の茶が「古茶」。
若々しく爽やかな香りの新茶と、コクのある味わいの古茶との比較があるから、新茶の初々しさが引き立つというもの。

眞黒の丈夫な柵や古茶の壺 青木紅酔

新しいモノと、古いモノをどちらも愛でる、あるいは新古をミックスして、そのセンスを競うという楽しみ方が、私たちの周りに多くなっている。



アンティーク、コレクティブル

私も古いモノは大好き、子供の頃には祖父たちの住まいを探検して、気に入ったものを見つけては、それにまつわるストーリーを聞かせてもらうのが楽しみだった。トランクに入った絵ハガキや写真、柵の上に置かれたピンズやブローチ、古い箱の中もドキドキする宝ものでいっぱい、という気がしたのだ。

古いモノには、温かい触感があり、優しい色がある、それに見惚れていたのが嵩じて、アンティークジュエリーが好きになった。特にエドワード七世(在位 1901~1910年)の頃に作られた“白いジュエリー”(プラチナとダイヤモンドとパールの端正なジュエリーが多い)に魅せられて、博物館やマーケットを見て歩いている。

ところで、日本での古物ブームは、TV「なんでも鑑定団」に因るところが大きいと思うが、これは、イギリスBBCの「Antiques Roadshow」がネタ元かと思う。

最大のオークションハウス Sotheby's と Christie's があり、町ごとにアンティークマーケットもあるイギリスでは、とにかく古物好きが多く、<個人のアンティークを鑑定する>お宝に事欠かない。

日本でも戦争で焼かれなかった地域には古物持ちが多く、鑑定するお宝に事欠かないことが、「なんでも鑑定団」の長寿を支えていると思う。

さて、“アンティーク”とは、100年以上の年月が経ったものというのが、市場の考え方だが、背景には、100年を待たねば評価が定まらないとの了解もある。

ところが、現代のアンティーク市場では<100年以上モノ>だけでは品数が足りず、価格も高くなりすぎるため、<100年は経っていないが、趣味性が高い品>が“コレクティブル”と呼ばれて注目されるようになった。

“コレクティブル”は、雑貨ジャンルに多く、1940年~70年代に製造されたファイヤークィングやオールドパイレックス(USA)といった、大衆的な大量生産品も含まれている。その他にもホーンジー(英)等の食器、ティベアやパービーやブライス等の人形も、大きなマーケットになっている。価値というより趣味性の強いアイテムなので、興味のない人にはガラクタだが、コレクターにとっては垂涎のお宝になる。



5月のつるバラ
名前は不明

(更地で拾った枝を挿し木したため)

ヴィンテージ

さらに古さとは別の基準の“当たり年”のようなものもあり、こちらは“ヴィンテージ”と呼ばれている。

“ヴィンテージ”では「ヴィンテージ・ジーンズ」の知名度が高いが、もとはヴィンテージ・ワイン(Vintage wine=ブドウの出来が良い年に作られた極上ワイン)からきていて、過去の名品ジーンズ(Levi's 501、505のような)をヴィンテージ・ジーンズと呼ぶようになった。ジーンズのほかに、ヴィンテージ・アロハはコレクターが多い。

アンティーク関連のジャンル

100年以上古いのが、アンティーク

30年~90年古い、コレクティブル

過去の当たり年が、ヴィンテージ

ヴィンテージのレプリカ

新品のアンティーク仕上げ

おもしろいのは、“アンティーク”ではレプリカ(複製品)が好まれないのに、“ヴィンテージ”にはレプリカがよく作られること。ジーンズの Levi's には、ヴィンテージラインというシリーズまである。

これは、アンティークは「時」を大切に扱う歴史寄りのモノであるため、レプリカを軽く扱うのに対して、ヴィンテージはデジタル的なこだわりモノのため、レプリカを複製版などとして本物と同質扱いするためかと思う。

さて、個人的な楽しみ方の範疇としては、<自分で使い込んでよい味を出す>というのものもある。ジーンズ、セーター、ジャケット、茶器、パイプ、ブーツ等...着心地などの「心地」や、一緒に過ごした時間分の「愛着」など、これも趣味性の高いモノになる。



サザエのツボ

雨に晒して、白く丸くなるのを楽しんでいる